

2020 年度

第 5 回国際 ICT 利用研究学会全国大会
IIARS2020

国際 ICT 利用研究学会

全国大会講演要約集

2020 年 12 月 6 日(土)

オンライン会議

主催 国際 ICT 利用研究学会

未来のために
かえていくこと
まもるもの

未来の地球のために、ICT ができること。

世界中の人々が笑顔で暮らすことができる、豊かで夢のある社会。
クリーンなエネルギーが、様々なプロセスで活用される未来。
そんな豊かな地球を創ることは、私たちの大切な役割です。

富士通は、環境にやさしいものづくりから、気候変動の高精度な分析、
ビッグデータを利用した省エネルギーなど、環境をはじめとした地球
規模の課題解決に ICT がもっと役立つべきだと考えています。

子どもたち、さらにその先の世代の大切な地球をまもるため、
富士通は ICT でイノベーションの創造にチャレンジしていきます。

これが、私らしさ。


大学では色々な仲間と一緒に成長してきた。

レポートに悩んでいるとアドバイスをくれたり、私からアイデアを出すこともあった。

先生はいつも励ましの言葉をかけてくれた。

だから見てほしい、これが私らしさ。



 WebClass の e ポートフォリオ機能をご紹介します。

e ポートフォリオ・コンテンツ

深い学びを可能にする「気付き」を誘発。学習と評価の一体化で、学習プロセスを見える化します。自己評価・教師評価・相互評価をレーダーチャート上に可視化。ショーケースポートフォリオで作品集にまとめる事ができます。

学習記録ビューア

各授業で蓄積された成果物を一箇所ですべて確認ができます。学生が履修した授業の一覧や、課題の実施状況、さらには4年間で提出した全レポートの一覧表示とダウンロードが可能で、振り返りの場として活用できます。

修学カルテ

定期的な目標設定と振り返りや、課外活動の記録を蓄積できます。修学カルテは画面上に入力項目を自由に設置できるのが特徴。年度や学期の切替タブ、学生プロフィール、ループリック、レーダーチャートを配置できます。

WebClass の無料体験モニターを募集しております。

ラーニング・カンパニーでありたい。

日本データパシフィック株式会社

〒186-0002 東京都国立市東 1-4-15 国立 KT ビル

TEL : 042-573-6721 FAX : 042-573-6728

www.datapacific.co.jp



WebClass クラウドサービス

WebClassクラウドサービスは、高い信頼性を持つクラウド基盤を利用して、WebClassのすべての機能・サービスをワンストップでご提供する「SaaS」タイプのサービスです。

サーバの監視や脆弱性対応、WebClassのバージョンアップなどのサービスが含まれ、さらにご要望に応じたカスタマイズも可能です。

サービス内容

WebClass通常のサポートに加えて、以下のサービスを提供します。

- ⚙️ 障害対応
- ⚙️ 死活監視
- ⚙️ 負荷観測

サービスに障害が発生した際の原因切り分け及び復旧対応をいたします。

60秒間隔でWebClassログイン画面が正常に表示できるか監視します。

ロードバランサーの負荷観測を実施します。

レスポンスが恒常的に遅くなった場合などには、必要に応じてシステムのチューニングを実施いたします。

システム負荷の監視を行います（CPU使用率、ネットワーク使用率、ディスクIOの速度）。

教材データ、成績データ、設定データの日時での自動バックアップと管理を行います。

障害時にはバックアップデータからのリストア作業を行い、前日までの状態に復旧させます。

- ⚙️ データ管理

サービスレベル

- ⚙️ レスポンスタイム

利用想定人数のアクセスでテキストベースのテストを行った場合、

レスポンスタイムの90パーセンタイル値が5秒以内とします。

- ⚙️ 年間使用可能時間割合

死活監視システムの障害発生時間をもとに算出します。

保守業務による停止時間を除き、99.9%以上の年間使用可能時間を保証します。

99.0%以上、99.9%未満だった場合、クラウドサービス利用料金の10%を返金します。

99.0%未満だった場合、クラウドサービス利用料金の25%を返金します。

- ⚙️ 障害時のデータの復旧

直近の日次バックアップデータをリストアし、サービスの復旧作業を行います。

価格

ご利用の規模により価格が異なりますので、別途お見積りいたします。

日本データパシフィック株式会社

〒186-0002 東京都国立市東1-4-15 国立KTビル

Tel : 042-573-6721 Fax : 042-573-6728

<https://www.datapacific.co.jp/>

プログラム

2020年12月6日（日）

08:00 –	受付開始
09:00 – 10:30	分科会 1 部（A、B、C、D 会場）
10:45 – 12:15	分科会 2 部（A、B、C、D 会場）
12:15 – 13:15	ポスターセッション（A 会場） 役員懇談会（D 会場）
13:15 – 14:05	共催（協賛）企業プレゼンテーション（A 会場）
14:15 – 15:15	基調講演（A 会場）
15:30 – 16:45	分科会 3 部（A、B、C、D 会場）

分科会会場

A（Zoom A 会場）、B（Zoom B 会場）

C（Zoom C 会場）、D（Zoom A 会場）

共 催

株式会社 内田洋行

株式会社 ソリッドレイ研究所

日本データパシフィック株式会社

富士通株式会社

後 援

一般社団法人 国際 I C T 利用研究機構

一般社団法人 国際応用情報学研究機構

株式会社 OME

株式会社 カンファレンスサービス

※(S)は学生発表

	題 目	著 者
A 1	9:00-10:30	座長：保本 正芳（近畿大学）
A1-1	(S)雲画像解析による積乱雲の時空間変化に関する研究	矢作拓仁(立正大)
A1-2	(S)正規化水指数(NDWI)を利用した河川氾濫の被害把握に関する研究 -平成27年9月関東・東北豪雨を対象として-	菅野太一(立正大)
A1-3	(S)NDVIを用いた四国の森林限界の抽出に関する研究	西村爽(立正大)
A1-4	(S)HIMAWARI-8を用いた斜面温暖帯の季節変化について	吉田一真(立正大)
A1-5	(S)オオカミを再導入した場合のシカとオオカミの個体数変動	小菅悠人,後藤真太郎(立正大)
A1-6	平成30年7月豪雨に伴う広島周辺の3300ヶ所の崩壊地と地質との関係	中村洋介,船山莉緒(福島大,福島市役所)
A2	10:45-12:15	座長：中村洋介（福島大）
A2-1	(S)東京オリンピック会場周辺地域における空間放射線量の把握と評価	今村大聖,白木洋平(立正大)
A2-2	(S)シカ道がキタサンショウウオの産卵場所に与える影響 -釧路湿原を対象として-	箭内大輔(立正大)
A2-3	(S)リモートセンシングデータによる農作物の生育ステージのモニタリングに関する研究	長田晃宗(立正大)
A2-4	(S)ドローンの空撮画像を用いたCNNによる水田雑草判別に関する基礎的研究	小谷野郁弥(立正大)
A2-5	(S)ジオインフォマティクスを用いた水稲栽培管理の基礎的研究	佐藤響平(立正大)
A2-6	(S)Raspberry Piと監視システムを用いた農業支援に関する研究	大友拓也,後藤真太郎(立正大)
A3	15:30-16:45	座長：田中敏幸（慶應大）
A3-1	PARI/GPによるSelf-Dual Codeの生成	永田清(大東文化大)
A3-2	(S)認知症早期発見のためのモーションキャプチャーに基づく歩容追跡及び動作解析	劉哲均,佐藤礼華,高見友幸(大阪電気通信大)
A3-3	(S)自動運転技術と安全性について	黒田莉音,内田夢乃,森賢太郎,白川絃大,井上慶祐(大東文化大)
A3-4	(S)ARの活用と進展	堀江泰弘,磯崎純也,齋藤将希,伊藤滉希,勝俣侑大(大東文化大)
A3-5	(S)位置情報を活用したサービスの浸透とその危険性	並木愛結,木川裕(大東文化大,日本大)
	題 目	著 者
B 1	9:00-10:30	座長：福田真規夫（太成学院大学）
B1-1	オンライン会議における発表時のタイムマネジメントに関する一考察	次郎丸沢(株式会社カンファレンスサービス)
B1-2	(S)グリーンIT	宇野敦,高橋歩夢,土屋歩未,石原優(大東文化大)
B1-3	(S)スポーツ障害予防を目的とした大学スポーツのIT化	加瀬谷広奈(日本大)
B1-4	(S)中国人口政策について	岩間廉(立正大)
B1-5	(S)若者の選挙投票率を上昇させるための提言	馬場史乃(埼玉女子短大)
B1-6	(S)サブスクリプションモデルの展望	中村彩花(日本大)
B2	10:45-12:15	座長：次郎丸沢（株式会社OME）
B2-1	(S)好感度の高いキャラクターの特徴に関する研究	佐藤玲花(立正大)
B2-2	(S)マイナンバーカードの普及状況と課題	吉田祥也,吉川舞,金千咲季(大東文化大)
B2-3	(S)CVSにおけるICTを活用した経営の現状と課題	石川桃子(日本大)
B2-4	(S)レジ袋有料化の効果と達成度の考察	小山翔太(立正大)
B2-5	『譜雙』に基づく古代中国盤双六遊戯方法の解析 —— 広州雙陸「不打雙陸」を中心に	木子香,張超然,高見友幸(大阪電気通信大)
B2-6	初期平安京の復原再考 ～古代都城の設計思想～	高見友幸(大阪電気通信大学総合情報学部)
B3	15:30-16:45	座長：鎌田光宣（千葉商科大）
B3-1	(S)地震災害時における避難シミュレーション	小穴拓実(立正大)
B3-2	(S)大規模イベントを見据えた適切な外国人救急利用社会の構築	広重友成(日本大)
B3-3	(S)品川区における逃げ地図の利用に関する研究	小林拓矢,後藤真太郎(立正大)
B3-4	(S)東京都のリサイクル分野におけるSDGsアクション評価モデルの構築	張冰,後藤真太郎(立正大)
B3-5	(S)大地震・津波における情報伝達の問題と改善策の提案	黄川田玲(立正大)

題 目		著 者
C 1	9:00-10:30	座長：鈴木治郎（信州大）
C1-1	(S)5つの業におけるコロナウイルスの影響と効率性分析	加藤桂,保泉綾音,湯越亮介,丸山大雅,濱野弘喜(大東文化大)
C1-2	(S)コロナ禍における5業界の自己資本利益率分析	三上滉仁,木村蓮蓮,矢島駿,従二凜仁,金子僚汰(大東文化大)
C1-3	(S)今後の日本企業オフィスの在り方についての考察	保谷宇洗(日本大)
C1-4	(S)少子高齢化社会における新型コロナウイルス対策の提言	藤井優希(埼玉女子短大)
C1-5	(S)コロナ禍における業界別効率性分析	山浦祐奈,内海陵,小林裕次郎,須田翔太(大東文化大)
C1-6	(S)インターネット投票を利用した若者の政治離れへのアプローチ	渡邊結衣(日本大)
C2	10:45-12:15	座長：田中雅章（ユマニテク短大）
C2-1	(S)Withコロナで Bluetoothを活用した小規模施設の新しい三密回避	野口円果(日本大)
C2-2	(S)SIRモデルを用いた感染拡大想定について	武部昂平(立正大)
C2-3	(S)高齢期の就労におけるテレワークの効力と有用性	伊藤良浩(日本大)
C2-4	(S)超高齢社会におけるICT技術を浸透させるための提案	根本光,木川裕(大東文化大)
C2-5	(S)ネットスーパーの利用率向上施策について	櫻井翼(日本大)
C2-6	(S)リーグの投げ銭システム導入について	池田賢太(日本大)
C3	15:30-16:45	座長：白木洋平（立正大）
C3-1	(S)高齢者向けの脳トレゲーム企画の適用性に関する研究	田静,廖?貽,劉哲均,佐藤礼華(大阪電気通信大)
C3-2	(S)労働人口減少に対する業務効率化	廣澤綺菜(日本大)
C3-3	(S)ICT技術を活用したストレスマネジメントと課題	林武範(日本大)
C3-4	(S)IoT機器の現在の今後の発展	白川菜々子,市原優香里,板橋拓実,海野航太,松南大介(大東文化大)
C3-5	(S)情報格差が引き起こす高齢者の孤立の現状と今後の提案	菱山佳純(日本大)
題 目		著 者
D 1	9:00-10:30	座長：青木和昭（立正大）
D1-1	学生の意識の違いによるアクティブラーニングの効果	田中雅章(ユマニテク短大)
D1-2	実験実習科目のオンライン授業による教育効果に関する報告	青木和昭(立正大)
D1-3	(S)小学校におけるICT教育による疲労の現状と対策の考察	山屋奈々子(日本大)
D1-4	プログラミングの導入教育に関する提案 ～3D-CGプログラミングの反転授業～	山住富也(名古屋文理大)
D1-5	学生による授業評価アンケートに対する教員のアクションプラン分析	細田貴明(東京都立産業技術大学院大),丸山博之(早稲田大),松尾徳朗,川田誠一(東京都立産業技術大学院大)
D1-6	(S)オンライン授業と対面授業	難波剛司,唐崎淳也,小泉遥都(大東文化大)
D2	10:45-12:15	座長：山住富也（名古屋文理大）
D2-1	(S)VRシステムにおける手術プロセスの3D動画表現	張 勁之,戦 揚,佐藤 礼華(大阪電気通信大)
D2-2	(S)うねりチャート底値買い投資方法による各銘柄別の勝率と適応度	森本聖也(立正大)
D2-3	(S)世界各国での大学時期の調査およびその概要	篠宮学(立正大)
D2-4	(S)大学1年次のタイピング能力と学習時間に係る要因分析	新井愛,藤田菜摘,山下倫範(立正大)
D2-5	(S)日本における電子教材の発達と課題	熊谷純花(日本大)
D2-6	オンライン授業における学生の学習成果について—情報通信ネットワーク論の授業における学生の理解度向上—	竹井潔(聖学院大)
D3	15:30-16:30	座長：木川裕（日本大学）
D3-1	(S)地域による環境意識の違い	石塚悠斗(立正大)
D3-2	EPUB電子書籍を利用した教育コンテンツ作成に関する検討	佐久間貴士(千葉県立保健医療大),小堺光芳(埼玉女子短大),山下倫範(立正大)
D3-3	(S)地域格差がもたらす通信環境格差と平均年収との関係に関する調査	黒澤亮稀(立正大)
D3-4	日本自動車産業の研究開発の取り組みに関するデータ分析	上山俊幸(千葉商科大)
D3-5		

題 目		著 者
P	12:15-13:15 (コアタイム)	座長：佐久間貴士 (千葉県立保健医療大学)
P1	(S)大学生を中心とする求職者と求人主体である企業とのミスマッチに関する研究	横山将也, 遠山正朗(千葉工大)
P2	(S)睡眠が学業成績に及ぼす影響に関する研究	島根彩良, 遠山正朗(千葉工大)
P3	(S)働き方の管理における自主性に関する研究	鈴木杏奈, 遠山正朗(千葉工大)
P4	(S)作業環境がモチベーションおよび作業成績に及ぼす影響に関する研究	石橋燎, 遠山正朗(千葉工大)
P5	(S)ストレスが食事の消費量に与える影響に関する研究	佐久間友貴, 遠山正朗(千葉工大)
P6	(S)人間関係に与える笑顔の影響に関する研究	佐久間将人, 遠山正朗(千葉工大)
P7	(S)テレワークの特徴と継続可能性に関する研究	諫山崇人, 遠山正朗(千葉工大)
基調講演 (14:15-15:15)		発 表 者
DX時代を創造するデザイン思考		木嶋恭一 (大東文化大)

A1 会場：A 会場 9:00-10:30
座長：保本正芳（近畿大学）

A1-1

矢作拓仁(立正大)

本研究では、台風 19 号で大きな被害を受けた東北地方を研究対象地域とし、雲特性画像を用いて積乱雲の 10 分ごとの発生頻度を調査するとともに、集中豪雨時の積乱雲発生頻度と総降水量の関係について考察することを試みた。その結果、集中豪雨時の積乱雲発生頻度の分布について明らかにすることができた。

A1-2

菅野太一(立正大)

本研究では関東・東北豪雨の被災地である茨城県の常総市を研究対象地域として、平成 27 年 9 月関東・東北豪雨を対象として浸水度合いについて NDWI を用いて算出し、標高および過去の地図を用いて浸水度合いとの関係性について評価を行った。その結果、詳細な解析には至らなかったものの、標高および過去の流域が影響を及ぼしていることが示唆された。

A1-3

西村爽(立正大)

本研究では Landsat-8 から算出される正規化植生指数（Normalized Difference Vegetation Index: NDVI）を利用して四国の森林限界の抽出を試みた。その結果、本論で一例とした筒上山においては 1437m から 1730m までの NDVI は 0.5 以上でほぼ一定となったものの、1730m から NDVI が急に下がっている様子が見て取れ、NDVI を利用することで森林限界の抽出を行える可能性について示唆することが出来た。

A1-4

吉田一真(立正大)

本論文では、HIMAWARI-8 を用いて 2018 年の関東地方における夏季および冬季明け方の斜面温暖帯の分布傾向について比較・評価を行った。その結果、夏季明け方の地表面温度は、都心部から郊外に向け徐々に低下し、標高などの違いがある場合でも顕著な変化はなかったものの、冬季明け方においては山地中腹に斜面温暖帯が発生している様子を見ることが出来た。

A1-5

小菅悠人,後藤真太郎(立正大)

データ無し

A1-6

中村洋介,船山莉緒(福島大,福島市役所)

「平成 30 年 7 月豪雨」について、特に崩壊地と地質との関係に着目して調査を行った。3,361 の崩壊地のうち、581 の崩壊地が地質境界上に、195 の崩壊地が断層上にあり、1/4 の割合で相関があることが判明した。

A2 会場：A 会場 10:45－12:15
座長：中村洋介（福島大）

A2-1

今村大聖,白木洋平(立正大)

東京都における広域の放射線量を面的に表示し評価を行うとともに、東京オリンピックの開会式や多くの競技が行われる新東京国立競技場に隣接する代々木公園内にて放射線量の計測を行った結果として、得られた放射線量の値は体に直接的な害を与えるような値ではなかったものの、その分布にはばらつきが見えることが明らかとなった。

A2-2

箭内大輔(立正大)

本研究では、北海道釧路湿原のトリトウシ原野南部を研究対象地域とし、UAV によって空撮された画像を用いた、エゾシカの生息痕である「シカ道」の把握について、オルソモザイク画像・数値標高モデル・教師付き分類を用い、GIS を活用して検討を行った。その結果、傾向を掴むことはできたものの、シカ道の的確な把握には至らなかった。

A2-3

長田晃宗(立正大)

野菜の収穫時期が客観的に判断するため、UAV やリモートセンシングの技術を適用することを目的とする。このため、マルチスペクトルセンサとハイパースペクトルセンサを用いて反射率スペクトル関係性が見られるかを調査する。

A2-4

小谷野郁弥(立正大)

水田に生育する植物個体をドローンで撮影し、その空撮画像を用い、畳み込みニューラルネットワーク (Convolutional Neural Network : CNN) によって水田雑草判別を行った。学習は、ImageNet によって事前に学習を行った VGG16 ネットワークを使用し、ファインチューニングを行った。その結果、正解率が約 95% と高い精度を得ることが出来た。

A2-5

佐藤響平(立正大)

ジオインフォマティクスと UAV によるリモートセンシングをもちいて水稻栽培時の環境データの取得とデータ間の関係性評価を行いジオインフォマティクスをもちいた水稻栽培管理を検討した。なお、本研究では環境保全型農業による栽培を行っていることから、雑草が多く繁茂するため、雑草と水稻の分離処理を重点的に行った。

A2-6

大友拓也,後藤真太郎(立正大)

近年, IoT を用いたスマート農業などの取り組みが進んでいるが, 一方で日本の就農者の高齢化も進み, 深刻な問題となっている. 現在, 農業における ITC 活用事例も増える一方, 農業人口の高齢化や慣れない作業, 初期導入時のコスト面などから導入が厳しい農家もいると考えられる. 本研究では, Arduino と Raspberry Pi が比較的安価で手に入り, 取り扱いやすい点に着目し, 低コストかつ高精度の観測装置の作成, 運用を目的とする.

A3

会場 : A 会場 15:30-16:45

座長 : 田中敏幸 (慶應大)

A3-1

永田清(大東文化大)

情報通信においてデータの誤りを検出し修正を行う誤り訂正符号は, その完全性確保のために重要なものであり, データの性質や伝送路の種類などによって, 様々な条件に適したものが提案されている. ここではその一つである, 剰余環の Self-Dual Code を生成するアルゴリズムを紹介し, 数式処理フリーソフトウェア PARI/GP を使った生成プログラムを示す.

A3-2

劉哲均,佐藤礼華,高見友幸(大阪電気通信大)

認知症に関する既存研究により, 軽度認知障害 (mild cognitive impairment: MCI) や認知症を有する高齢者の歩行能力低下の問題が有することが明らかになった. そして, 高齢者の歩行障害に対する評価, 動作解析も様々な方法によって研究を行っている. 歩行能力低下による MCI 高齢者の認知症リスクも増加になるため, 高齢者への長期的歩行状態への追跡と動作解析が認知症早期発見にも一助となる. 本研究では常設可能なモーションキャプチャーを用いた長期的歩容追跡と動作解析システムの応用を目的とした.

A3-3

黒田莉音,内田夢乃,森賢太郎,白川紘大,井上慶祐(大東文化大)

若者の車離れが加速する一方で, 自動運転技術に対する関心は高いようである. 自動運転技術の普及は若者に再び車に興味をもってもらうきっかけになる. 現在, 自動運転技術の普及にとっては安全性が大きな課題になっている. 本稿では, 自動運転技術とその安全性について検討する.

A3-4

堀江泰弘,磯崎純也,齋藤将希,伊藤滉希,勝俣侑大(大東文化大)

今日の情報化社会において技術革新がものすごいスピードで進んでいる. その中でも AR (拡張現実) は多くのことに活用されている. そこで, 本研究では AR の新しい活用方法の考察と, どのような形で広く認識してもらうかといったことを模索する.

A3-5

並木愛結,木川裕(大東文化大,日本大)

現代の日本は、高性能スマートフォンの普及を背景に、GPS、携帯基地局や Wi-Fi 等で取得する位置情報を活用したサービスが、存在感を高めている。近年では若者に触れる位置情報を活用した多くのサービスが登場していることから、本稿では、若者の位置情報に対する危機意識が薄れているのではないかという仮説をもとに、現状の把握やアンケート調査を通じて、位置情報サービスの浸透に伴う課題について考察するものである。

B1 会場：B 会場 9:00-10:30
座長：福田真規夫（太成学院大学）

B1-1

次郎丸沢(株式会社カンファレンスサービス)

COVID-19 の流行により、2020 年は学会の会議に占めるオンライン会議の割合が高くなった。オンライン会議を行う上で問題になることの 1 つが発表時間の管理、いわゆるタイムマネジメントである。本稿では他学会で使用したタイムマネジメント手法を紹介し、本会議で使用するタイムマネジメント手法について検討する。

B1-2

宇野敦,高橋歩夢,土屋歩未,石原優(大東文化大)

今日世界では地球温暖化問題が深刻化している。地球温暖化問題を耳にしたことは誰もが確実にある。異常気象など過去に事例のないニュースばかりである。地球温暖化問題への様々な対策が取られている中で、私たちはインターネットの記事で富士通株式会社のグリーンポリシーイノベーションという記事を見つけそこに書かれていたグリーン IT による地球温暖化への貢献が書かれており興味を持ち研究を行った。

B1-3

加瀬谷広奈(日本大)

東京オリンピックの影響もあり,IT ビジネス拡大の波はスポーツ産業分野にまで広がりつつある。このようなスポーツ IT 発展の動きは,スポーツ産業の市場規模拡大のみならず,スポーツ障害の予防やパフォーマンスの向上など選手らにとっても多くのメリットをもたらすと考えている。本稿では,スポーツ障害の予防の観点から,学生スポーツの抱える諸問題を提起し,大学スポーツにおける ICT の有用性とその拡充について考察する。

B1-4

岩間廉(立正大)

第 1 章 はじめに 1-1 建国以来の潜在的な危機 1-2 極端から極端へ 1-3 変わらない中国 第 2 章 一人っ子政策 2-1 中国のベビーブーム 2-2 移り変わる中国の生育政策 2-3 一人っ子政策へ 2-4 形骸化していた政策 2-5 一人っ子政策の生み出したもの 2-6 生育政策の後遺症 第 3 章 少子高齢化 3-1 中国の人口構成の現状 3-2 早すぎた少子高齢化 3-3 少子高齢化の影響 3-4 少子高齢化に立ち向かう政策 第 4 章 中国社会の変化 4-1 中国結婚難の現状 4-2 中国を牽引する 80 后(バーリンハウ) 4-3 バーリンハウの結婚動向 4-4

B1-5

馬場史乃(埼玉女子短大)

10 歳代・20 歳代の選挙の投票率が低いため、若者の意見が政治に反映されにくく、投票率の高い 60 歳代・70 歳代以上に有利な偏った政治が行われる可能性が高くなる。そこで投票率が低いとされる 18 歳から 20 歳の学生が在籍している短期大学にて「選挙投票をすること」に対する意識調査を行った。世代による偏った政治が行われるのを防ぐために、どのようにすれば若者が選挙に参加するのか、について研究を行った。

B1-6

中村彩花(日本大)

近年、日本の商品やサービスの買い方、売り方に大きな変化が訪れている。永久的に利用する購入とは異なり、一定期間の使用権を購入するサブスクリプションというビジネスモデルが拡大しているのに対し、米国では既にサブスクリプションモデルの撤退が進んでいる。日本の拡大と米国の撤退、米国の撤退例を踏まえた上で、今後日本でサブスクリプションモデルが消費者に浸透していくのかどうか、調査結果を参考に展望を考察した。

B2 会場：B 会場 10:45－12:15
座長：次郎丸沢（株式会社 OME）

B2-1

佐藤玲花(立正大)

毎日のように新しいキャラクターが生まれ消えていく中で、多くの人から愛されるキャラクターにはどのような特徴や共通要因があり、年齢や性別によって好感度の違いがあるのかを明らかにする。もともと子供向けだったキャラクターはどのようにして幅広い年齢層に受け入れられ、何を求められているのかをキャラクターから得られる効果を捉え、分析し論じていく。

B2-2

吉田祥也,吉川舞,金千咲季(大東文化大)

マイナンバーカード制度が始まり、様々な取り組みをしているにも関わらず、マイナンバーカードの普及率は政府が目指している目標値まで届いていない。我々は、現状としてなぜ取得が広まらないのかを、マイナンバーカードの歴史や経緯、普及状況などを踏まえ考察し、どうすればマイナンバーカードを持つ人が増えるのかの提案を行う。

B2-3

石川桃子(日本大)

現在 EC などの発展により買い物の形が変化しているが「食品・飲料・酒類」の EC 化率は低く依然リアル店

舗は需要は高い。本稿では、CRM や SCM などの視点から ICT を活用した CVS 経営の現状を考察し、情報格差や労働者不足などの社会問題にも焦点を当て、CVS 経営の課題に対して利益拡大を目的とした提案を行う。

B2-4

小山翔太(立正大)

2020年7月1日から全国の小売業を伴う事業者全てを対象に、レジ袋有料化が義務づけられた。本制度の目的は、「消費者のライフスタイルに変革を促す」ことである。以前からレジ袋有料化を行ってきた自治体では、一定の成果があったことが確認されている。本研究では、レジ袋の売上データを基に、開始から4ヶ月でどのような変化があったか、上記の目的はどの程度達成されているのかを考察する。

B2-5

木子香,張超然,高見友幸(大阪電気通信大)

盤双六は、二人で対局する盤上競走ゲームである。盤双六は古くからあり、千年以上遊ばれ続けたが、近代になって滅んでしまった。千年の歴史を持っている盤双六は古来の逸話や伝説、文学作品、絵画などの芸術作品にも度々登場したが、遊戯方法に関する記述は少なく、不明な点が多く存在する。本研究は、12世紀に書かれた古文書『譜雙』を手掛かりに、中国古代盤双六遊戯方法を解析し、さらに日本盤双六遊戯方法にアプローチする。

B2-6

高見友幸(大阪電気通信大学総合情報学部)

初期平安京の復原では、正方形として設計された京城が、造営後に北側および南側へ拡張したという仮説を提起した。同じような京城の変更は、平城京においても実施された可能性があることを示す。また、研究の端緒となった初期平安京の復原では、法隆寺に見られる1尺=28.1cmの物差しを前提としたが、この尺度28.1は、天円地方の数学的表現から導かれる1.273という値と高麗尺35.6cmとの間に密接な関係性をもつことがわかった。

B3	会場：B会場	15:30-16:45
	座長：鎌田光宣(千葉商科大)	

B3-1

小穴拓実(立正大)

本研究では、埼玉県熊谷市の駅周辺地域を研究対象地域とし、MAS(マルチエージェントシミュレーション)を用いて避難シミュレーションを試みた。その結果、重要な避難道路が封鎖された場合において避難完了時間が5分以上の遅くなることが明らかとなった。

B3-2

広重友成(日本大)

現在、日本は救急需要の増加を背景に救急車の不正利用という社会問題がある。その中でも2020年東京オ

三上滉仁,木村蓮蓮,矢島駿,従二凜仁,金子僚汰(大東文化大)

本論は、コロナ禍における5つの異なる業界及び各業界を代表する3社を、近年株式投資等で重要視される自己資本利益率について分析するため、自己資本利益率の構成指標となる売上高当期純利益率、総資産回転率、財務レバレッジを2019年、2020年の有価証券報告書を用いて各指標の観点から業界平均を算出し、各業界の収益構造の特徴を明らかにしたものである。

C1-3

保谷宇洸(日本大)

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、多くの企業が急遽テレワークや在宅ワークに切り替え始めている。しかし一方で、ワークスタイルの多様性において先進国であるアメリカでは、一部のテレワークの廃止を表明する大手企業もある。本稿では、日本国内においてテレワークでの業務が増える中で、改めてテレワークの有用性や課題、オフィスに通うことの価値について考察していく。

C1-4

藤井優希(埼玉女子短大)

少子高齢化社会において既にひっ迫していた医療現場に追い打ちをかけるように、新型コロナウイルスの大流行が発生した。まず新型コロナウイルスに対する世代による認識の違いは本当に存在するのかを明らかにするために短期大学学生の意識調査を行った。続いて高齢者がいかにすれば安心して医療を受ける体制を整えられるのか、多大なる影響を受けた病院と通院に抵抗感を持つ高齢者への提言を試みた。

C1-5

山浦祐奈,内海陵,小林裕次郎,須田翔太(大東文化大)

本研究は新型コロナウイルスが企業経営にどう影響しているのかを測定したものであり、小売業界、卸売業界、電力業界、不動産業界の4つの業界を対象に、業界ごとの効率性について売上債権回転日数、棚卸資産回転日数、買入債務回転日数、キャッシュコンバージョン・サイクル(CCC)の観点から明らかにしている。同時にB to Cの業界とB to Bの業界の2種類から比較を行い、特徴について論じているものである。

C1-6

渡邊結衣(日本大)

近年、少子高齢化が深刻化すると共に若者の投票率の低下が問題になっている。選挙権が18歳に引き下げられたことによる若年層の投票率上昇が期待されたが、思うようには上がらなかった。そこで若者にとって身近であるインターネットを利用した選挙の投票方法について着目した。若者に政治や選挙に対する意識の調査を行い、エストニアと日本のインターネットを利用した投票の比較し現状での課題点と今後の展望について考察した。

C2

会場：C会場 10:45-12:15
座長：田中雅章(ユマニテク短大)

C2-1

野口円果(日本大)

新型コロナウイルスがもたらした旅行業界への影響は甚大であり、経済を活性化させながら感染拡大防止のため三密を作らせない必要がある。本稿では新型コロナウイルス流行による旅行者の意識に注目し、三密回避のために Bluetooth 活用例の効果と問題点を整理するとともに、既存の活用例を基に寺院等の小規模施設で適用する具体的事例を検討し、さらにインバウンド観光客や日本の団体観光客との混雑回避対策を考察するものである。

C2-2

武部昂平(立正大)

世界中で猛威を振るい、今なお終息が収まらない新型コロナウイルス感染症(COVID-19)がある。本稿では、この感染モデルを初心者にわかりやすく説明するためにシミュレーションモデルを、SIR モデルを用いて作成した。

C2-3

伊藤良浩(日本大)

現在、我が国では 65 歳以上の人口割合と労働力人口割合が増加の一途を辿っている。加えて、政府は「高年齢者雇用安定法」を改正し、70 歳まで定年引上げを行うなどの努力義務を設ける予定である。その為、より高齢就労者が増加すると考えられる。本稿ではテレワークという働き方に着目をし、高齢者の就労状況とテレワークで働くメリットを踏まえた上でアンケートを行い、テレワークという働き方が高齢者の就労を促進する可能性があるのかを考察した。

C2-4

根本光,木川裕(大東文化大)

近年の日本では、国政選挙における投票率が低下し続けており、中でも若者の投票率の低さが著しい。それに比べ、高齢者の投票率は安定的に高く、高齢者が国政を担っている現状が見てとれる。逆に言えば、この高齢者中心の社会構築によって ICT 技術の浸透が遅れているとも言える。本稿では、いかにして今の超高齢社会に対して ICT 技術を浸透させるか、高齢者を対象に調査を行い、高齢者に対して最も適切なネット教育方法とは何かを提案するものである。

C2-5

櫻井翼(日本大)

新型コロナウイルスの世界的流行により緊急事態宣言が発令され、不要不急の外出の自粛など人々の消費行動が抑制された。このような状況下で、買い物を EC に置き換えたり外食を宅配サービスに置き換えるなどの ICT の利用が高まったと考えるが、ネットスーパーの利用率はそこまで上昇していないという現状がある。本稿では、ネットスーパーに焦点を当ててアンケート調査から課題を考察し、利用率を向上させる施策を提案する。

C2-6

池田賢太(日本大)

新型コロナウイルスの影響は、Jリーグに大きな影響をもたらした。感染対策の為に観客制限によりJクラブは大きな収入源を失いJ発足以来最大の危機に瀕した。そんな中、各Jクラブが様々な施策を模索した。その一つの施策として導入されたのが投げ銭システムであった。本稿では、Jリーグの顧客にアンケート調査をする事で投げ銭システムの効果を検証し、また新たなスポーツビジネス誕生への期待を言及した。

C3

会場：C 会場 15:30-16:45
座長：白木洋平（立正大）

C3-1

田静,廖?貽,劉哲均,佐藤礼華(大阪電気通信大)

これまでの調査では、筆者は高齢者が既存の脳トレゲーム利用時の状況に関する情報を収集分析し、今後認知症予防のための高齢者向け脳トレゲームの開発の課題を見つけ出した。本稿では、主に高齢者向け脳トレゲームのインターフェース、適切な難易度及び高齢者に好かれるゲーム要素に関する課題の解決策を探り、ゲームの企画手法を提案し、高齢者向けの脳トレゲームの開発と応用を目指す。

C3-2

廣澤綺菜(日本大)

働くかたちは様々で、今日では柔軟な環境が推進されている。日本の大きな社会問題である人口減少、労働人口減少は深刻化している。そんな日本の現状に対して、労働という形でどのようにアプローチできるのか。日本の課題である、労働生産性向上に対する解決策にテクノロジーを用いることでどのような効果が生まれるのか。本論文は、企業がICT、RPAの導入をすることで得られる効果や、労働生産性向上させるためにどのようなアプローチをするべきかに焦点を当てていく。

C3-3

林武範(日本大)

現代社会においてストレスマネジメントのスキルは多くの人々に求められる。しかし、ストレスの受け方や感じ方、適した解消の方法には個人差があり、誰もが同じ方法でマネジメントできるとは限らない。ストレスの認知方法に着目し、ストレスマインドセットの形成要素からビッグファイブ性格特性や睡眠、運動状態の認知を用いた、個人でストレスマネジメントするための技術活用状況について調査した。

C3-4

白川菜々子,市原優香里,板橋拓実,海野航太,松南大介(大東文化大)

近年、通信機能の発達に伴いIoTが普及している。IoTは現実世界の物理的なモノに通信機能を搭載してインターネットに接続、連携される技術のことである。IoTには、モノを操作する方法、モノの状態を知る方法、モノの動きを検知する方法、モノ同士を通信する方法といった活用方法があり、それらは私たちの日常生活に大きく影響している。ここでは、IoTが今後どのように発展していくか考察していく。

C3-5

菱山佳純(日本大)

高齢化社会が進行している現代において、高齢者の孤立が重要課題である。また、情報化が進む近年は、情報を容易に取得することができるようになったが、高齢者は若者に比べインターネット利用率が低く、情報格差が目立つ。本稿では、高齢者の情報格差、そして情報格差が生み出す高齢者格差を軽減するための日本での取り組み、海外での取り組みを踏まえた上で、現時点での ICT 利用の課題点、今後の展望を考察した。

D1 会場：D 会場 9:00－10:30
座長：青木和昭（立正大）

D1-1

田中雅章(ユマニテク短大)

アクティブラーニングは、これまでの受動的な学習から能動的に学習を行う授業の総称の授業である。しかし、アクティブラーニングは魔法の教育方法ではない。つまり、アクティブラーニングの教育効果を発揮させるためには、受講する学生が前向きに取り組む姿勢が必要不可欠である。本稿では相互評価データと体験後の感想データから学習分析を行った。その結果、学生の意識の違いによってアクティブラーニングの効果に違いがあることを報告する。

D1-2

青木和昭(立正大)

現在、多くの大学でオンライン授業が実施されており、実験実習科目でもオンラインでの授業となっている。本稿では実験実習科目をオンラインで実施した際の教育効果について、学生へのアンケート結果と課題等の提出状況をもとに分析した結果を報告する。

D1-3

山屋奈々子(日本大)

ICT 教育は現在多くの小学校で活用されている一方で一部児童に疲労をもたらしている。そこで児童の ICT 教育による疲労問題を取り上げ、その現状改善を目的に小学校における疲労に関する現状調査を教員と児童の二視点から実施した。本稿では調査を踏まえて現状改善に最も効果的であると考えられる対策とその具体的内容の可能性について言及している。

D1-4

山住富也(名古屋文理大)

3次元のグラフィックスをコーディングによって出力する言語を、プログラミング初心者向けに利用した場合の効果を検討する。言語は「POV-Ray」というフリーウェアで、文法事項を解説した教材を与えて反転授業を行った。グラフィックスの出力という実行結果を得られる言語と、他の言語のコーディングの学習とを比較する。

D1-5

細田貴明(東京都立産業技術大学院大), 丸山博之(早稲田大), 松尾徳朗, 川田誠一(東京都立産業技術大学院大)

東京都立産業技術大学院大学(以下, AIIT)では, 学生に対する授業評価アンケートが実施され, アンケート結果に基づき授業を改善するために, 各教員がアクションプランを作成することとしている。現状, 授業評価アンケートを通して, 学生側がどのような評価を行なっているのかについての分析が多く, 授業を改善するための教員のアクションプランの分析に関する研究は多くない。本稿では, AIITにおける授業評価アンケートに対して教員がアクションプランを作成する際, 何に着目し, どのように授業改善を実施しようとしているのかを明らかにすることを目的として, 分析, 考察を行ったものである。

D1-6

難波剛司, 唐崎淳也, 小泉遥都(大東文化大)

オンライン授業における対面授業との比較。オンライン授業における授業の質はどう生徒たちは感じているのか。また, 新一年生におけるオンライン授業への満足度が低いという点から, なぜ通常の授業を受けていないのにそういった論議が出るのかという疑問をもとに調査を試みた。

D2 会場: D 会場 10:45-12:15
座長: 山住富也 (名古屋文理大)

D2-1

張 勁之, 戦 揚, 佐藤 礼華(大阪電気通信大)

手術している内容を VR システムにおいて表現することは, 医学生の手術見学際やその予習と復習のためのツールとして活用可能である。これまでの教科書的な手術内容の説明について文書と画像あるいは動画などを使ったが, 我々がさらに理解しやすいように, VR 技術を用いた直感的な表現したシステムを開発し, インタラクティブな操作によって, 空間, 視点, 時間などの制約なしに手術に関する勉強を支援できることを目指す。

D2-2

森本聖也(立正大)

昨今, 私たちの身の周りは IT 化に伴い, プログラミングで制御されたものだらけであり, 利用することによって日常生活を便利なものになっている。その中でも注目を集める分野として「株取引」が挙げられ, 人工知能を使った投資方法が増えてきている。そこで一つの投資方法に着目して, 過去に対象の動きを見せたパターンはいくつあり, そのパターンが訪れた時の対象の銘柄での勝率はどのくらいなのかを, プログラミングを使って検証していく。

D2-3

篠宮学(立正大)

日本国内では新型コロナウイルスの感染拡大による小中高大での授業が中断される事態が生じた。この影響により, 特に大学受験を控える高校生の学習進度が遅滞していることから, 大学受験時期の議論から大学入

学時期を4月から9月へ移行する案が浮上した。その案の支持理由として、多くの国では9月入学であり、日本もグローバルスタンダードの視点から、9月入学への移行を進めるべきだという議論が起こった。著者は「多くの国では9月入学」が事実なのかについてまず疑問を持ち、本報告ではその調査結果とともに入学時期の分布特性について調査した第1次報告を行う。

D2-4

新井愛, 藤田菜摘, 山下倫範(立正大)

情報活用能力調査によれば、高校生の1分間平均文字入力数は24.7文字である。社会人では1分間平均文字入力数100~120文字を必要とする中、中間に位置する大学生のタイピング能力の現状を検証すると同時に関わる要因について調査した。調査に当たっては可視化(散布図)や数値化(相関係数)を用いて要因間の関係を解析した。結果等については、対象者の1分間平均文字入力数は27~28文字であり、練習時間と各要因(スコア, 正確率, WPM,)間が負の相関という結果を得られた。

D2-5

熊谷純花(日本大)

近年世界的に広がりを見せる電子書籍市場は、旧態依然とした日本の出版界にも大きな変化を生んでいる。コロナ禍を経てその存在感・価値はさらに見直され、電子書籍利用は層を広げている。本文では電子教材を取り巻く現状と課題について述べており、PCの操作のみならずプログラミングまで学習指導要領に組み込まれる時代だからこそ、電子教材を活かしたデジタル教育は有用であると言える。

D2-6

竹井潔(聖学院大)

今年度は新型コロナの影響で授業はオンライン対応となった。そしてオンライン授業がスタートしたが、果たしてオンライン授業を受講する学生たちの学習成果が上がるのだろうかということが懸念される場所であった。そこで情報通信ネットワークの授業の理解度を促進するために、授業ごとに理解度テストの実施、および授業期間の事前・事後で簡単な確認事項を実施、学生の授業に対する理解度を確認した。オンライン授業と対面授業の学習成果について比較し確認する。

D3

会場：D会場 15:30-16:45
座長：木川裕（日本大学）

D3-1

石塚悠斗(立正大)

環境教育の充実は極めて大きな課題であり、環境教育を充実させるためにはその取り組みを評価し、改善していくことが欠かせない。これまで、環境意識に関する調査は行われたが、地域による環境意識の違いについては明確になっていない。そこで本研究では、大学生を対象として環境意識の違いについて調査する。また、地域別に調査結果を整理することで地域による環境意識の違いについて調べる。

D3-2

佐久間貴士(千葉県立保健医療大), 小堺光芳(埼玉女子短大), 山下倫範(立正大)

課題作成の手順や解説等の部分を HTML 形式から EPUB 電子書籍の技術を利用することで、教員のコンテンツ作成に要する時間の削減を目的とした新たな展開を試みている。EPUB 電子書籍での出力を基本として考え、新たに Apple 社製の Pages を利用し、試験的に制作してきたこれらのコンテンツを電子書籍化し、スマートフォンの利用を想定したコンテンツ生成の利点を検討したいと考えている。

D3-3

黒澤亮稀(立正大)

今回の調査では、通信環境への問題について人口の大小による地域格差および地域住民の平均年収が通信環境格差の一因となりうるかどうかを確認することを目的とした。調査方法としては、NTT ドコモ携帯電話基地局を対象とし、主要諸地域での基地局設置数と平均携帯接続者数の関係、特に東京都 23 区を対象としては基地局設置数と地域住民の平均年収との関係について調査した。調査結果から（散布図的に）基地局の対人口は一バランスについて関東地方内でもまた、関東地域と他地域明らかな違いを見ることができた。

D3-4

上山俊幸(千葉商科大)

経済を支える裾野の広い産業である自動車産業が転換期を迎え、各企業は対応を迫られている。コロナ禍で先行きが不透明な状況で、自動車産業の企業は研究開発費率を下げざるをえない状況ではないかとも考えられるが、将来を考えた場合、実際にはどうであろうか。また、社会や投資家に対しては、着実に研究開発を進めているということをアピールしていかざるをえないのではないかと考え、それらのことをデータ分析によって検証しようとするものである。

P1

横山将也, 遠山正朗(千葉工大)

企業としての魅力を図る指標のなかに定着率というものがある。定着率とは、離職率の対となる言葉である。離職率の高さの原因のひとつとして、求職者としての大学生と求人主体である企業との間のミスマッチが考えられる。本研究の目的は、特に大学生を念頭に置いた求職者と求人主体である企業との間のミスマッチについて検討することである。大学生の早期離職に着目することは、目的の達成に寄与する。

P2

島根彩良, 遠山正朗(千葉工大)

近年、日本の学齢期の子どもの睡眠時間の短縮が問題となっている。特に、中学生は「世界一眠らない」と表現されているほど睡眠時間の短縮が顕著である。夜間睡眠時間短縮が、学生の認知・情動機能に与える影響に注目が集まっている。認知・情動機能は、学生に期待される学習や団体行動の基盤を形作ると考えられている。睡眠の不足が、認知・情動機能に悪影響を与えることは広く認識されている。こうしたことを踏まえつつ、睡眠が学業成績に及ぼす影響について検討する。

P3

鈴木杏奈, 遠山正朗(千葉工大)

企業は多くの人々によって成り立っている。しかしながら、現在の日本では、人口減少などにより人手不足となっており、限られた人材で業務を進める必要があることから、生産性を高めることが求められており、また一方で働き方改革も注目されている。生産性を高めるためのひとつのアプローチ方法が管理方法に着目することである。本研究では、従来からの科学的管理法に注目したうえで、自主管理方式による生産性向上の可能性について検討する。

P4

石橋燎, 遠山正朗(千葉工大)

近年では、企業側が優秀な人材を確保する手法などのためにテレワークを活用することが増えている。また、個人側でも会社で仕事する生活だけでなく、仕事以外の生活も充実させたいという意識が広がっている。最近では、新型コロナウイルスの影響で在宅勤務の割合は多くなっている。今までは入社して仕事をする人が、突然在宅勤務になっている人が多いのが実情である。また、そのような仕事環境の変化によって成果にも影響が現れている。

P5

佐久間友貴, 遠山正朗(千葉工大)

新型コロナウイルスにより、これまでの生活とはかけ離れた新たな生活様式へと変化した。そうした生活が長期化し、閉鎖空間という特殊環境を経験し、様々な心的ストレスが発生した。それに起因し食生活が乱れると

いうことも発生している。本研究では、人間が生活する上で欠かすことのできない食事の消費量とストレスについて着目した研究を行う。ストレスのかかっていない状態での食事の消費量と社会により引き起こされた社会的ストレスの時の食事消費量の変化に関して検討する。

P6

佐久間将人, 遠山正朗(千葉工大)

現代の社会はコミュニケーションをとる手段として SNS を用いる傾向にある。このような中、コミュニケーションをとることに表情がどれほど大切かということは研究によって指摘されている。また幼児教育から笑顔に関連する研究でも指摘されている。本研究では、コミュニケーションをとる中で笑顔が相手にどのような印象を与えているのか検討すること、およびストレスに対して笑顔がもたらす効果の検討を目的とする。

P7

諫山崇人, 遠山正朗(千葉工大)

新型コロナの影響を受けて、急速にテレワークの導入・実践が広がっており、総務省によると、企業のテレワークの導入率は、2015年～2017年の平均で14%程度であった。また、パーソル総合研究所の調査によれば、2020年4月、正社員のテレワーク実施率は27.9%にまで増加している。本研究の目的は、テレワークに関するこれまでのデータからその特徴を見出し、テレワークの継続可能性について検討することである。

令和2年度 第5回 IIARS 全国大会 委員名簿

全国大会実行委員会

委員長	永田 清	大東文化大学
副委員長	白坂 亨	大東文化大学

全国大会運営委員会

委員長	次郎丸 沢	(株) OME
副委員長	青木 和昭	立正大学

全国大会審査委員会

委員長	鈴木 治郎	信州大学
副委員長	平 治彦	日本データパシフィック (株)
副委員長	田中 敏幸	慶應義塾大学
委員	青木 一雄	沖縄産業保健総合支援センター
委員	鎌田 光宣	千葉商科大学
委員	木川 裕	日本大学
委員	小塚 光芳	埼玉女子短期大学
委員	佐久間貴士	千葉県立保健医療大学
委員	次郎丸 沢	(株) OME
委員	辰島 裕美	金沢星稜大学女子短期大学部
委員	高見 友幸	大阪電気通信大学
委員	田中 雅章	ユマニテク短期大学
委員	永田 清	大東文化大学
委員	福田真規夫	太成学院大学
委員	保本 正芳	近畿大学

未 FUTURE CLASSROOM® 来型学習空間をご提案します。



建築躯体に手を加えることなく ICT空間を容易に構築。

現在の授業では、固定されたテーブルに着いて一方的に話を聞く学習ばかりではなく、最新のICT機器を用いた授業や、PBL※などのグループ単位で能動的に活動するような授業が増えてきています。

そういった授業の中では、通常の「レクチュア」から、グループ毎に分かれて活動する「グループワーク」、成果を共有・発表する「プレゼンテーション」や「ふりかえり」といった場面の転換が必要不可欠です。それぞれのシーンにマッチした空間セッティングへの変換が、スムーズかつクイックに実現できるこれからの教室、それが「FUTURE CLASSROOM®〈フューチャークラスルーム®〉」の考え方です。

※PBL (Project Based Learning) : 授業形態の一つで「課題解決型授業」のこと。



「フューチャークラスルーム®」は、学校関係者や企業・研究機関と一緒に新しい授業スタイルの研究開発・実証実験を行える場所として、新川本社ビル(東京都中央区)、大阪支店(大阪府大阪市)、九州支店(福岡県福岡市)に設置しております。ぜひ、ご来場ください。

内田洋行 高等教育事業部



いい「学校・教育・授業」づくりを支援いたします。
<http://school.uchida.co.jp/>

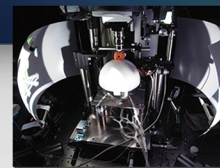
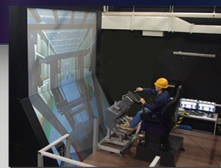
東京 〒135-0016 東京都江東区東陽2-3-25 東日本営業部 ☎ 03(5634) 6441
大阪 〒540-8520 大阪市中央区和泉町2-2-2 西日本営業部 ☎ 06(6920) 2493



OMEGA SPACE

イベント、エンターテインメントに!

教育、研究支援に!



VR空間構築・体験ソフトウェア

オメガスペース

オメガスペースは、PC環境下において最高のリアルタイム レンダリング パフォーマンスを実現し、お客様のニーズに合わせたインタラクションを提供するためのアプリケーション ソフトウェアです。

開発・販売元

株式会社ソリッドレイ研究所

〒221-0835 神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町2-20-1 YTUビル5F

TEL: 045-324-6841 URL: www.solidray.co.jp E-mail: pro@solidray.co.jp